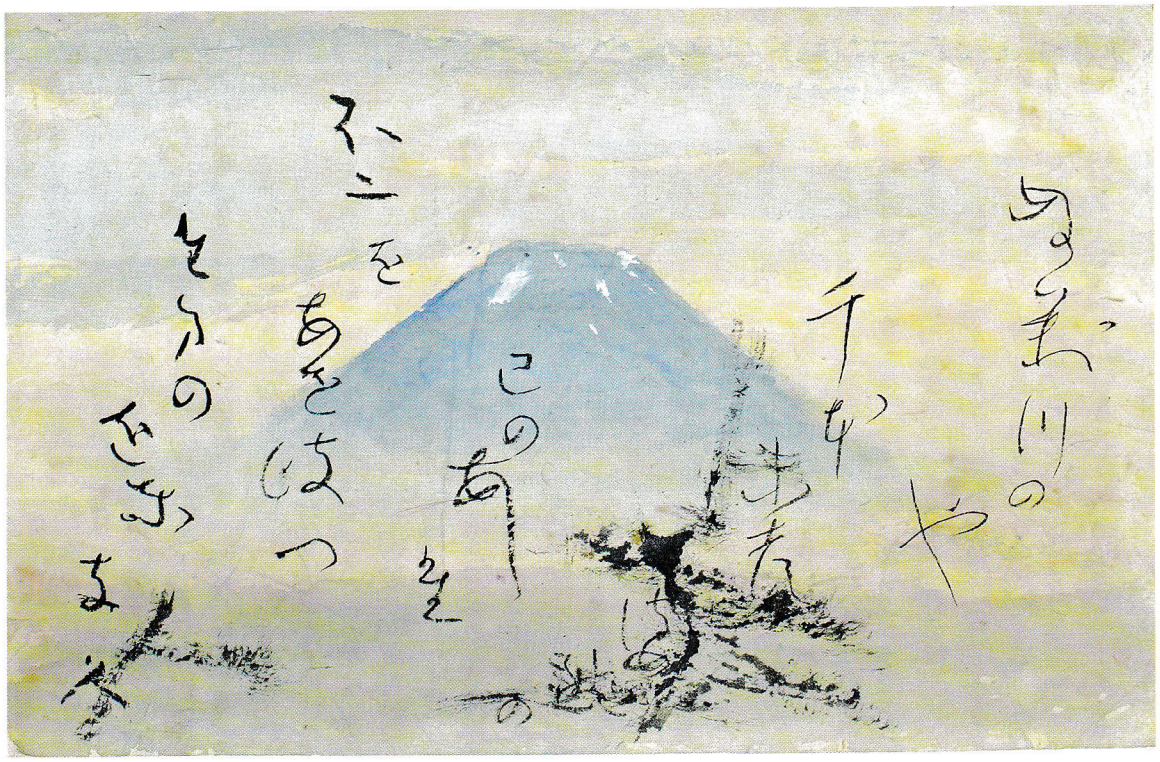
沼津市
明治史料館通信
2008.4.25（季刊 年4回発行）Vol. 24 No. 1　通巻第93号



藤井達吉「千本松原と富士」（個人蔵）
沼津在住時の作品。同じ下宿先にいた学生に贈ったもの。紙も藤井自身が漉いた。

ぬまづ近代史点描 ⑥⑤

藤井達吉と沼津

藤井達吉は、明治十四年（一八八一）、碧海郡棚尾村（現愛知県碧南市）に生まれ、大正から昭和初期にかけての日本の工芸の近代化に多大な役割を果たし、「近代工芸の先駆者」といわれている。独学で研究し制作した活動は、七宝、金工、木工、染織などの工芸全般や日本画など幅広いものであったが、作家としての藤井の活動の特徴は、自身の作品を制作するだけではなく、工芸の地位向上や地場産業・伝統工芸の振興に力を傾注したところにあり、藤井が工芸作家として芸術界で名を知られるようになるまで、「工芸」は芸術・美術とはみなされず、職人芸のひとつとしてしか見られていなかった。

明治三八年、上京して美術工芸作家として活動を始め、大正元年（一九一二）には、前衛的な芸術家の団体「ヒュウザン会」創立時にただ一人の工芸家として参加し

た。文展（現在の日展）に工芸部門を設置しようと奔走したりもしたが、周囲との軋轢から体を病み、この頃、東京で漢方医塩崎靖と知りあった。

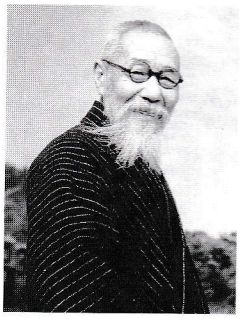
藤井と沼津との関わりは、昭和三一年（一九五六）一月頃、七十五歳のとき移ってきたところにある。故郷碧南市に美術館の寄付を申し出たのに実現せず、また愛知県総合芸術研究会の盛り上がらない動向に失望した藤井が東京への転居先を探していたところ、塩崎靖が沼津の塩崎家の屋敷（現沼津市松下町）への転居を勧め、これを受け入れた。

沼津での居宅は塩崎家屋敷内の土蔵を改造したものだった。同じく塩崎家の屋敷内に下宿していた学生が、ひっそりと暮らす藤井を誘って、岡宮の光長寺などの市内の古刹を案内した。藤井は千本松原の海岸を愛し、よく散歩にでかけては、駿河湾越しに富士山を眺め、小原和紙のスケッチ帖に墨絵を描いたという。沼津を離れる際に知人に宛てた書簡でも「富士山を心ゆくほど拝し満足」と記している。沼津での達吉は周囲からの雑音も消え、落ち着いて制作していたようである。飄々とした感じで「まさに隠者の暮らしぶりであった」と学生は回想している。

しかしながら、夏が近づくにつれて増す土蔵特有のかび臭さに辟易し、同年九月には知人のつてで岡崎市井ノ口町に移った。

その後、湯河原、岡崎を「転々浪々」しながら、病んだ体で制作活動を続け、昭和三九年八月、岡崎市の病院に入院中、心臓発作で亡くなった。享年八三才。

平成二〇年四月五日、藤井の生誕地である碧南市に、彼の名を冠した「碧南市藤井達吉現代美術館」が開館し、藤井の念願がかなえられた。



藤井達吉
（碧南市教育委員会提供）

〈参考文献〉市橋彰男『知っておきたい岡崎の人物伝』第十一号、情報文化社、二〇〇五年

江原素六とその周辺〈48〉

遠山金四郎の公用人浅野従兵衛

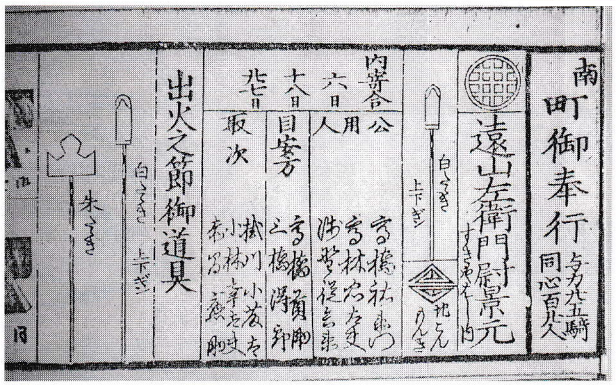
江原素六の母方の大叔父に浅野従兵衛という人物がいた。正確には、祖母すみ子の妹の夫である。すみ子とその妹は、幕領代官配下の手付をつとめた御家人秋元利左衛門の娘であった。しかし、秋元家から妻を迎えた浅野は幕臣ではなかった。浅野従兵衛は江戸町奉行遠山景元（金四郎・左衛門尉）の公用人、つまり直参ではなく旗本の家臣であった。

浅野は、「頗る資産に富み、又多くの書籍を蔵」しており、それを江原のために開放し、「若し宅にない本で欲しいと思ふものがあつたら遠慮なく云ふがよい、買入れて貸してやる」と申し出たという。また、浅野の紹介によって旗本深津摂津守（喜三郎）の屋敷に出入りすることになり、同家子弟の家庭教師をつとめるかたわら、摂津守の供をして上層社会の交際を見聞きするようになった。さらに浅野の長男が高弟となっていた剣客斎藤弥九郎の道場（神道無念流・練兵館）に通うようにもなった。家庭の事情から勉学の機会に恵まれなかった江原少年は、浅野の好意により文武の研鑽に一層励むとともに、広い世間を知ることになったのである。江原が浅野従兵衛のもとを訪れ、深津家や斎藤道場に行くようになったのは安政四年（一八五七）一六歳の時であるとされる。また、安政六年二月江戸の火災により四谷愛住町の江原家が焼失した際には、浅野・深津の援助によってすぐに新築することができたという（『江原素六先生伝』）。

遠山景元（一七九三～一八五五）は高五〇〇石の旗本で、天保一一年（一八四〇）から一四年にかけ北町奉行、弘化二年（一八四五）から嘉永五年（一八五二）にかけ南町奉行をつとめた。武鑑などの

史料によれば、浅野は天保一二年北町奉行遠山の目安方として登場し、弘化二年には南町奉行遠山の公用人となり、嘉永五年遠山の辞職とともに辞めたようである。まさに江戸町奉行時代の景元に仕えたのである。

旗本の家臣は、大名家と同様、本来は譜代から成っていたが、やがて必要な時だけに雇われる者が多くなった。家臣の中のトップである用人は、主家の家政全般を任され、場合によっては家老と称することもあった。領地である村の豪農が用人として採用されることも多かったほか、専門知識を身に付け江戸で旗本各家を渡り歩く用人もいた。いずれも臨時雇用の用人は、解雇された場合は武士身分を失った。滝沢馬琴が旗本用人の子に生まれ、武家と町人の狭間に生きた人であったことはよく知られる。



嘉永２年(1849)の『江戸町鑑』に掲載された南町奉行遠山景元公用人浅野従兵衛の名前

町奉行の公用人は、主人である旗本が奉行に就任した際、主とともに奉行所の公務に従事した用人のことである。奉行を補佐する公用人は三人おり、さらにその下には目安方二人が置かれた。公用人は、奉行所の用部屋に出勤し、奉行の命令を与力・同心に伝えたり、逆に下からの文書を取り次いだりしたほか、訴訟の際の呼び込み、火事場への出動の供などをつとめた。職階的には、与力の下、同心の上に位置付けられた。

浅野は遠山家譜代の家臣ではなく、臨時雇いの家来だったと思われる。ただし、どのような出自を持つのか、あるいは他の旗本・奉行に仕えた経歴があったのかなどは確認できていない。公用人としては、「与力給知之内」から一〇〇石を給された。他に役得もあったであろう。

遠山家の日記によれば、浅野は公用人を辞めた後も、出府して御機嫌伺に参上したり（安政二年二月五日）、本所の屋敷のうち一間の拝借を願い出たり（四月六日）、暑中見舞に訪れたり（六月一五日）といった具合に旧主家との交際は続いた。同日記には、「浅野重次郎」「浅野従次郎」という名前も登場するが、従兵衛の誤りか、息子であろうか。

江原素六が浅野家に出入りするようになったのは、従兵衛が遠山家を辞した後のことである。江原にとっては祖父のような年齢だったと思われる。残念ながら、浅野家のその後の消息は不明である。江原が残した史料の中に、「明治十年度書状往復」という住所録があり、「浅野るい」「浅野徳平」という名前が記されているが、それが従兵衛の縁者であるのか否かはわからない。ちなみに、同じ住所録には、遠山景元の子孫で、静岡藩では浜松二等勤番組に属し、後に毎日新聞記者となった「遠山景福」の名前が記されている。

〈参考文献〉田中正弘「旗本家臣中村（鹿島）喜平治日記の翻刻と解題」（『栃木史学』第六号、一九九二年）、宮地正人「幕末旗本用人論」（『幕末維新期の社会的政治史研究』、一九九九年、岩波書店）、岡崎寛徳「安政二・三年の遠山金四郎景纂・景彰」（『大倉山論集』第五十一輯、二〇〇五年）、岡崎寛徳編『遠山金四郎家日記』（二〇〇七年、岩田書院）、「略譜　第一輯之二」（『同方会誌』二八、一九〇五年）

（樋口雄彦）

史料館はタイムカプセル。
史料を未来に伝えます。
古い家や蔵・物置を取り壊すとき、蔵書などを処分しようとおもったときなど是非ご一報下さい。

お知らせ欄

◎第2回そろくまつりの開催

江原素六の命日を記念して、今年もそろくまつりを開催します。当日は観覧無料になります。どうぞご来館下さい。

とき　5月18日(日)　10時～15時

内容　◆「子どもたちの見た江原素六～江原素六学習作品展」◆金岡小学校児童による寸劇「そろく物語」◆子どもの遊び（竹細工・房楊枝つくり体験◆観覧会　16㎜映画「沼津兵学校」◆もちつき◆日吉太鼓◆素六音頭◆もちとすいとん配布

◎平成19年度受贈資料（順不同）

◆大浜陣屋関係資料（杉浦弘様）◆久須美祐利関係資料（田中泉様）◆大川通久関係資料（大川周作様）◆中村清一関係資料（中村清二様）◆宮川保全肖像画（宮川裕佑様）◆明治期和本・教科書類8点・その他俳句・地形図（金子賜子様）◆江原素六書幅（木村昭和様）◆典籍類（望月克彦様）◆昭和四年発行沼津市勢要覧（杉山昌弘様）◆満州出征兵士遺品、典籍類（城内学園様）◆古文書等（石井種生様）◆陸軍鉄製兜（加藤昇様）◆古文書・典籍等（植草慶一様）◆公害関係調査資料（中嶋勇様）◆国民服儀礼章等（白壁喜六様）◆絵葉書（桜井信一様）◆衣料切符（秋鹿敏雄様）◆戦時中の書籍など（中野忠様）◆戦時債券、航空徽章（長倉道太郎様）

◎平成19年度館蔵等資料の提供（順不同・敬称略）

◆株式会社学習研究社・『歴史群像』通巻84号・錦絵「伊庭八郎」、写真「仏式伝習隊」（江原素六関係資料）◆株式会社筑摩書房・高橋敏著『江戸の教育力』（ちくま新書）・『論語余師』（下香貫森田家文書）、◆築地魚市場株式会社・二〇〇八年カレンダー・絵葉書「（沼津の市街）魚河岸」「沼津本町」「沼津通横町」◆碧南市教育委員会・大浜陣屋址公園情報板・「大浜陣屋ノ図面」（大浜陣屋関係資料）◆磐田市旧赤松家記念館・パンフレット・写真「幕府派遣オランダ留学生」◆市川博物館友の会・市立歴史博物館友の会企画展「市川船橋戦争展」・写真「仏式伝習隊」（江原素六関係資料）◆三島市郷土資料館・ふるさと歴史文学コーナー企画展「三島を巡って～武田・北条・今川の歴史～」・『甲陽軍鑑』『孫子』（東間門田中家（西）文書）◆社団法人日本戦災遺族会・「戦災と平和展」・写真「沼津大空襲によって焦土と化した沼津市街」◆富士市立博物館・「天体にまつわる年中行事」・『和漢三才図会』（沼津文庫）、◆沼津市広報課・「広報ぬまづ」9月1日号・古写真◆横浜都市発展記念館・「写された文明開化―横浜・東京・街・人々―」・写真「大築尚志」（フリーマン撮影）（大築尚志関係文書）◆浮島地区連合自治会・浮島地区文化祭展示・沼津のあゆみ写真パネル◆沼津信用金庫・ぬましんストリートギャラリー企画展「小田川全之展」・小田川全之関係資料・島田三郎関係資料◆門池地区連合自治会、技能五輪おもてなし広場、門池の歴史、雨乞いの竜など◆沼津市商工振興課・技能五輪国際大会産業PRブース・古写真◆上本通り商店街振興組合・大手町地区再開発ビルイーラde開業関連イベント・「沼津市中心商店会社案内図」（昭和26年）◆沼津市商工会議所・イーラde開業関連イベント・古写真◆佐倉市立美術館・佐倉市郷土の偉人パネル展示・写真「大築尚志」（大築尚志関係文書）◆沼津市歴史民俗資料館・沼津・富士・三島三市共同企画展「遥かなる東海道～富士・沼津・三島の記録」・「青丘傾蓋集」など本町間宮家文書、本町清水家文書、原渡辺家（本陣）文書◆板橋区立郷土資料館・複製製作・高島茂徳肖像ガラス板写真（福田重固・高島茂徳関係資料）、調練駒（大野寛隆氏寄託）

沼津市明治史料館通信　第93号
編集　沼津市明治史料館
発行　沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂三七二―一
電話　〇五五-九二三-三三三五
FAX　〇五五-九二五-三〇一八
http://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/sisetu/meiji/index.htm